

幼児の内に潜むもの

川崎千束

幼いひとにかかわっていると、その心の底に、驚くばかりの深いもの、鋭いものを内包しているのを感じします。また、それを感知することによって、保育者の心も深まり成長してゆく事実を、現場の方々なら誰しも味わわれたことでしょうが、今、私は自分の経験の中から、二三の例を抜粋して幼児の内に潜むものを、再認したいと思います。

例(一)

七月の水に親しむ頃、年少組の舟作りの一群のために、必要な材料を数種取揃えておきました。ほとんどの子が、それらの素材に取り組んで、各自のイメージに近い表現ができたのか、喜々としてプールの方にかけてゆきました。独り残っているKに近づくと、力つきたという表情で、「何度つくり

直しても、浮いてしまうの」「それでいいんじゃないのお舟ですもの」「だけど僕のは潜水艦なんだもの」ああそうか、潜水艦があるんだった！ 保育者は、用意した浮上る材料ばかりを改めて見直して、言葉に窮しました。

傍に寄ってきたMが「舟の底に穴をあければ沈むよ」と事もなげに言うと、「それじゃ、浮上らせたい時、駄目じゃないか」

結局、Kの熱心な試行錯誤の末に、油粘土をまるめて、針金で舟に固定して、その重みで舟を沈め、浮上らせる時には、錨を上げるように粘土のかたまりを持上げるという原始的方法ながら考案し、潜水艦は完成しました。

自ら興味をもって潜水艦つくりに挑み、試行錯誤を重ねて、油粘土の錨をつけて舟を沈めることを遂に発見した、このKの心奥に育った深いもの鋭いものが、発達につながってゆくことを考え、このエネルギーが保育者の心の波長を高まらせ充足し、共々成長してゆくのでしよう。

例(二)

ある夜、「歯が抜けたから、べれすねずみに手紙を書くので素敵な封筒が欲しい」とHの要求です。小学二年生になっても、まだ、べれすねずみを信じているのかと、Hの幼なさ

を感じながらも、「サンタクロースっているんでしょか」と新聞の社説の委員に質問した少女も、同じ八歳だったことを思い出し、この年齢では、まだ幻想が残っているのだろうと封筒を与えました。手紙を書き終えた封筒を、「これ、枕の下におくと、べれすねずみが出てくるんでしょ」と念をおした。翌朝、浮かぬ顔をして現われ、「封筒をべれすねずみが持ったかなかったよ」と。私は「しまった」と困惑しました。枕下から封筒を抜き取っておくよう母親に依頼するのを忘れたからです。

「僕がちいさかった時、歯がぬけて手紙を書いてくれた時に、べあすだったかな、べれすだったかな、って迷っていたでしょう。こんども間違えたのじゃない?」「いえ、べれすねずみに間違いないし。あなたのべれすのべの字が、はっきりしなかったのよ」八歳の彼は、おとなのごまかしの虚言を、素直にうけて封筒の上書きを丁寧に書き直しました。

彼が三歳の時、何かにぶっつけて抜けた歯を、鼠に托す童話をしながら、「べあすだったかな、べれすだったかな」と曖昧なことを言ったのを、鮮明に記憶していて五年後の八歳に持ち出したのに驚かされました。身体の一部である歯が抜けた一抹の不安が、鼠に托すというユーモラスな転嫁によって

救われた際の、おとなの言葉だったから、かくも鮮明に記憶しているのでしょうか。おとなの測り知れぬデリケートさを幼児は秘めているのを知るとき、おとなには畏怖の念がおこります。

例(三)

年長組の保育室で「ねずみのがっこう」定価六五〇えん、菅原充さく・え、という、たどたどしいながら微笑ましい絵物語の本をみつけ、手にとりました。最初の頁には鼠らしい絵があつて、

ねずみが公園に遊びに行き、そこで箱をみつけ、その箱は魔女が仕掛けておいたものです。とファンタジックなものでしたが、読み進んでゆくと、鼠は姿を消し、自分が学校へゆく一日の生活が——絵とともに記してあります。

朝はパンです。歯がぬけたので甘いものは駄目で、バタをつけてたべました。割算の宿題ができました。宿題をするのを忘れたけれど、お母さんも知らなかったのでおこりませんでした。

兄姉もなく独りっ子なのに宿題だの割算だのと切ないほどの学校への憧れが描かれています。「ねずみはどうしたの」などというひとがいたら、心貧しい憎い大人です。